

千葉氏と 多古

現 在の千葉県の礎を築いた千葉氏と多古町には、深い関わりがあることをご存じですか。多古町には、千葉氏とのつながりや千葉氏に関連した山城が数多く存在しています。今回は平安時代の終わり頃から戦国時代まで、下総国（現在の千葉県北部など）を支配した武士の一族「千葉氏」と「山城」について触れていきます。

千葉氏とは 何をした一族？

千葉氏はその名前のとおり、現在の千葉県のルーツとなっています。大治元年（1126年）に桓武天皇の子孫である大椎常重が本拠を構え、「千葉」を名乗ったことが歴史の始まりだといわれています。この出来事は「**千葉開府**」と呼ばれ、現在も語り継がれており、今年で開府から895年が経っています。

千葉氏繁栄のきっかけとなった千葉常胤は源平の争乱の際、房総に逃れた源頼朝にいち早く味方し、一貫して支え続けました。本拠を鎌倉に置くよう進言するなど、鎌倉幕府の成立に大きく貢献しており、頼朝は常胤を父のように慕っていたといわれています。

こうして勢力を拡大した常胤は千葉氏が下総最大の武士団となる礎を築きました。

数多く残る

千葉氏の跡

多古町には千葉氏の信仰や文化に基づいた数多くの形跡が残っており、千葉胤貞が居館にしたとされる中区の「久保城跡」やその久保城を守る防衛拠点とされる「中城跡」などがあります。

また千葉氏には北極星・北斗七星を神聖視する「妙見信仰」があり、領地の周辺には関連する寺社が多く存在しています。多古町にも妙見神社がいくつかあります。

胤貞は熱心な日蓮宗信者で、領地である現在の佐賀県小城市に光勝寺を創建しており、そこには胤貞の像が祭られています。



中城跡



久保城跡



分城跡にある妙見神社



佐賀県小城市光勝寺に祭られている千葉胤貞像

千葉氏宗家最後の地

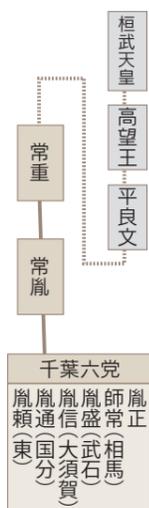
時は流れて室町時代中期、幕府の重鎮を務めていた千葉氏宗家十六代当主千葉胤直は足利氏と上杉氏の内紛に巻き込まれます。親類同士で争うこととなり、多古に逃げ延びてきた後、現在の島地区にある志摩城で対峙しますが、防戦の末、落城してしまいました。子どもである胤宣も多古城で応戦しましたが、再起叶わず自刃、その後逃げ延びた胤直も自刃し、千葉氏宗家は多古の地で最期を迎えることとなります。



寺作の東禅寺にある千葉胤直らの墓

千葉氏の繁栄
その後、常胤は息子たちと源平合戦や奥州合戦などを重ね、北は東北、南は九州までその領地を広げていきました。常胤の6人の息子たちはその領地を分割して引継ぎました。その後、本拠とした領地の地名を名乗り、「千葉六党」と呼ばれることとなります。

千葉氏略系図



千葉氏の主なゆかりの地 (地名は現在のもの)